

## ミレニアム・プロミス・ジャパン 第25回研究会

### 発展途上国における都市の課題

#### ～カトマンズの実体～

- 【講師】** 松田協子氏  
(青年海外協力隊 コミュニティ開発 ネパール派遣)
- 【日時・場所】** 2014年5月8日(木) 午後6時30分～午後8時00分  
JICA地球ひろば セミナールーム603
- 【概要】**
1. 自己紹介
  2. ネパールという国について
  3. 活動紹介
  4. 3か月過ぎて考えること
  5. 今後 ～キャリアプラン～
  6. 質疑応答

## 1. 自己紹介

私は大学では看護学を勉強していた。青年海外協力隊(JOCV)には様々な職種があり、その中に看護師枠というものもある。しかし、私は今回、敢えてコミュニティ開発の職種で受験をしており、かなり特殊なケースである。コミュニティ開発というのは、元々は村落開発と呼ばれており、村などのコミュニティに入って、住民と一緒に住民の目線で課題を解決していく職種である。他方、看護師の場合は、同じ目線というよりは、現地の看護師を指導するという形になる。私は住民目線で活動したいという思いがあったので、敢えてコミュニティ開発を受験した。

そもそも、私は、大学卒業後は都内の大学病院のERセンターで仕事をしていた。その後、ゆりあげ港朝市という全く違う職に就いた。それというのも、私が看護師1年目のときに東日本大震災が起きて、私は都内で働いていた。その時に、救命センターということもあって、被災地にベテラン看護師がみんな行ってしまっていて、新人はどちらかというと東京の方を守る仕事になっていた。実際に被災地に行って活動することができなかった。そこで、3年間で仕事を終わらせて、その後に協力隊が決まった時に、ちょうど半年間ブランクがあったので、この機会に実際に東北に行

# Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

こう思った。そして、看護とは別の新しい職種でどこまでできるかということにチャレンジしたいと思ったので、敢えてコミュニティ開発の分野で仕事を始めさせていただいて、6 か月間、商業施設のマネジメント等をさせていただいた。そして現在の協力隊派遣に至っている。

大学の時にも、看護学以外で NGO のインターンに参加したりしていた。特に私は、MPJ での派遣が非常に今の協力隊の活動につながっていると思う。MPJ のモザンビークへの派遣では、UNDP の方や国際機関の方、外務省の方等にお会いしたり、モザールという商社（三菱商事が 25% 出資している）の社員の方とお会いしたりして、様々な形で途上国に関わっている人たちを見て、色々な方とお話をした。その時に出会った JOCV の方が本当に素敵な方で、現地目線で、現地の言葉を使って、現地の人と同じように床で食事を食べている姿や、働く姿勢に非常に感銘を受けた。もちろん色々な分野で色々な形で関わっている人がいてその人たちもとても素敵だったのだが、私はやはり現地目線という所に非常に魅力を感じたので、私も仕事をして、その後に必ず協力隊に参加したいと思った。

## 2. ネパールという国について

ここで、実際にネパールという国について紹介をさせていただきたい。ネパールというどのような印象があるだろうか。

（参加者：「貧困。」「ネパール料理。」「ネパールの人々の心が大好きである。」 鈴木理事長：「エベレスト山があるので友人が観光に行ったりしている。ジェフリー・サックスさんの『貧困の終焉』によると、1 日 1.25 ドル未満で暮らしている人が多い地域がアジアはほとんどなくなっているのだが、ネパールやバングラデシュではまだまだ貧困がひどいという印象がある。）」

私は、ネパールに来る前はヒマラヤのイメージしかなかったのだが、住んでいると、インドと中国の大国に挟まれている影響を感じ、非常に面白い国であると思う。

### ■ ネパールという国について①

人口は 2700 万人で、宗教はヒンドゥー教が主になる。言葉はネパール語だが、あくまで公用語である。それぞれの民族が話す言葉というのがネパールにはあって、ネパール語を母国語として使っている人はほとんどいない。120 以上の民族が一緒に暮らしている国だ。国土は、ヒマラヤ山脈の 8000 メートルを超える所から、インド国境沿いの 100 メートル以下の平野もあって、気候もかなり違っているので、様々な文化があって非常に面白い。

### ■ ネパールのここが面白い！

今、私が非常に面白いと思っているのが、多民族国家であるということだ。マーガルという民族がいたり、ヒマラヤ山脈の近くにはシェルパ族が住んでいたりする。ネワール族はカトマンズ周辺の盆地に住んでいる。パフンという民族は、カーストでも一番上の民族で、結婚式に呼ばれたのだ

# Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

が、かなり華やかな結婚式でとても素敵だった。

## ■ ネパールという国について② ～政治～

発展に関して、政治というのが非常に大きいということを感じている。ネパールは元々、王政であり、1990年まで王政が続いていた。しかし、中国から来た毛沢東主義のマオイストによって、ゲリラ等の内戦が10年間続き、2008年に王政が終わって制憲議会が発足した。本当にまだ新しい国である。約5年前に新しい議会政治が始まったのだが、ネパールは民族ごとにコミュニティをそれぞれ作る性質があって、100以上の政党があるため、決まるものも決まらない。従って、今も憲法が無い。憲法を作ろうと言っていたのだが、結局決まらないまま時間が過ぎていったので、2013年に総解散をして、去年の11月に総選挙をまた行った。その時にやっと首相も就任したということで、政治面では、これから動き出そうとしている国だと思う。

地方行政についても、今は選挙がまだ実施されていない。それというのも、国の方の政治がままならないので、地方まで回り切れていないからである。従って、市長等も、国から派遣されてきており、その地域の間人になっているような状況ではない。地方議会も機能していないというのが現状だ。

## ■ ネパールという国について③ ～経済～

経済面はどういった状況なのかというと、産業は主に農業だ。人口の約80%が農業に従事しているといわれている。平均月収は8000ルピー（約8000円）だ。実際にカトマンズ市役所で働いているスタッフも、月収が1万円位だ。カトマンズ市内で一番の高給取りといわれているのが、マイクロバスの運転手なのだが、その人が月収15000ルピーである。

国際収支については、海外送金で貿易収支の赤字を埋めているというのが、ネパールの大きな特徴の一つである。ネパール人は今、UAEのドバイ等に土木関係の労働者として行っている人が多い。特に、カトマンズに住んでいる人たちは、だいたい家族に一人は海外で仕事をしていて、そこからの送金で生活を支えているという状況だ。実際に私のアパートの上に住んでいる人も、お兄さんが日本で今仕事をしていて、JICAの語学訓練の先生なのだが、かなりそれが支えになっているようだ。

## ■ 生活からみるネパールのインフラ

では、実際の生活はどういった状況なのかというと、電気については、1日12時間以上の計画停電がある。ネパールでは、月曜から金曜まで何時に停電があるかが分かるアプリが開発されている。カトマンズ市内が7グループに分けてあって、私は今3グループに住んでいるのだが、3グループの人たちは何時に停電があるといった状況で、皆が生活している。従って、市役所で働いていると、電気が無いのでパソコンが動かないと言って、もう仕事をしないということがある。ネパールには資源がないので、インドと同じようにIT関係に力を入れて、それを一つの産業にしていこうという動きもあるのだが、計画停電でパソコンが動かないため、結局そういったことを進めるのも難しい状況だ。

# Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

水については、私はカトマンズというとヒマラヤの麓のすごくきれいな水という印象があったのだが、そんなことはない。30年前までは泳げたとされていた川が、今は下水とゴミで異臭を放っている。生活排水がそのまま川に流されており、更に、ヒンドゥー教なので、火葬で燃えた灰をそのまま川に流すので、かなり汚い状況だ。

2年前からカトマンズ市内の都市計画が始まって、今は道路を新しく広げていこうということで、どんどん工事が行われている。1960年以降に建てられた建物というのは、元々国の土地に建てられたと認識されて、全て無条件で壊されて都市計画が進んでいるところだ。

## 3. 活動紹介

### ■ 活動紹介①

今、私はカトマンズ市役所の環境課に配属されている。廃棄物の管理について、ネパールでは全て地方行政に一任されており、この部署では、カトマンズ市内の廃棄物全てを管理している。廃棄物管理というのはかなりお金がかかるので、市の予算の約3分の1が私のいる部署に充てられている。それ位大きな課題に取り組んでいる部署で仕事をしている。

カトマンズ市内から約30キロ離れたシスドルという場所に、廃棄物の最終処分場がある。私のオフィスのすぐ隣には、その最終処分場に運ぶ前に一度、カトマンズ市内のゴミを全て集める中継地点があり、それをテクの中継地点と呼んでいる。

今、カトマンズ市役所ではコンポストをどんどん家庭に広げていこうという活動を始めている。というのも、開発途上国のゴミの特徴として、約6割は生ゴミと言われている。コンポストを使って生ゴミを処理することで、7割分のゴミが処理されるという考え方である。また、農業国ということで、良い土をつくるという面でも、コンポストというのは非常に有効なものとして使われている。カトマンズ市役所でもこれを導入して、市民に対して、市場で買う4分の1の価格で販売している。市場だと4000ルピーかかってしまうが、市では格安の1000ルピーで市民に対して販売を始めているところだ。

テクの中継地点には、プラスチックゴミを回収するプライベートの会社がずっと待機している。そこでは、一番下のカーストの人たちがプラスチックだけを拾っていて、その会社がそれをインドに持って行って売るということをやっている。これは、市役所の活動とは別になるのだが、そういった会社も市役所のすぐ隣で仕事を一緒にしているという状況だ。

### ■ ゴミはどこに行くの？

今、青年海外協力隊では、小学校に行って実際に環境教育を行うことを始めている。そのときに私は非常に驚いたのだが、小学生にゴミはどこに行くと思うかと尋ねたところ、処分場やゴミ箱という答えではなく、皆が「川」という風に答えた。

実際に写真を見ていただくと分かるように、ゴミがありすぎて川が詰まってしまっている。週に

# Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

1 回、市民で川をきれいにしようということで、ボランティア活動を行っているのだが、その時にゴミを掻き出ししたりしている。たまたま農村に行く機会があったのだが、首都だけではなく、農村もゴミだらけであった。道を歩いていても、かなりゴミが散らばっているという状況だ。

## ■ カトマンズ市内におけるゴミの現状

途上国のゴミの種類の特徴として、生ゴミが 6 割、プラスチックが 2 割と言われている。今はとにかく分別するというのを重要視している。生ゴミに関してはコンポストを利用する。プラスチックに関しては、今はインドにしかリサイクル工場がないので、インドに持って行って、なんとかこの 8 割近いゴミを減らしていこうとしている。

## ■ なぜここまで大きな問題となってしまっているのか

では、なぜこんなにゴミというのが大きな問題になってしまったのか。

カトマンズ市は急激な人口増加を遂げており、毎年約 4%の割合で人口が増えている。人口が増えるとゴミが増えるというのは正比例のようになっており、それが一つの要因だと思っている。

また、インフラの不整備というのもかなり大きな問題である。たとえば、最終処分場と言っても焼却して埋めていくわけではなく、ゴミをそのまま積み重ねていく方式である。JICA の支援で作られた最終処分場なのだが、途上国は生ゴミが約 6 割なので、特別な処理をしなくても、ただ積み重ねていけば土になる。そして、その下にパイプを作って汚水を流していけば、特に問題はないということで、そういった処分場が今作られている。本来であれば、燃やしてゴミを小さくした方がより効果的ではあるのだが、焼却場を作るためのお金もないし、焼却場を機能させるための電気もないということで、結局そういった施設を整備することができない状況だ。

そして、私が一番大きい要因ではないかと思っているのが、文化と習慣である。ネパールには元々ゴミという概念がなかったと言われている。というのも、ネパールでは基本的に生ゴミしかなかったし、家の外に生ゴミ等を捨てると、犬が食べていたり、カーストの一番下の人たちがゴミを拾ってそれを仕事にしたりしていた。従って、ゴミ箱にしっかり集める必要性が、元々の習慣や文化としてなかったのである。ゴミを綺麗にする仕事の人がいるということで、自分できれいにするという意識が人々の習慣としてないのである。町を歩いていると、大人も子どもも、食べたら全部ぽいと捨てるのが、日常よく見る風景になっている。

## ■ これまでの支援

これに対して、今までどういった支援が行われていたのか。シスドルの最終処分場は、日本の JICA の支援で作られている。また、私のオフィスの隣にあるテクの中継地点も、日本の支援で建てられたものだ。ここには 10 年程前にコンポストセンターというのものも作られ、生ゴミを減らしていこうという取り組みがあったのだが、5 年程前から壊れてしまっていて今は機能していない。ゴミの回収車については、中国が約 80 台を支援で入れている。シスドルに運ぶ為の大きなオレンジ色のトラックは、日本の支援で入ってきている。

# Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

## ■ 今後の課題 ～市役所の取組み～

市役所の取組みの最終ゴールとしては、とにかくゴミを減量していきたいということがある。今年の4月から、燃えるゴミと燃えないゴミの分別回収がようやく始まった。しかし、ここでも大きな問題があって、始めたのはよいのだが、最終処分場に集めるときにどう分けるかというところまで話が詰められていない。分別を市民に対して訴えても、結局、集めたときには全部一緒になってしまっているというのが現状である。

燃えるゴミと燃えないゴミで、トラックも新しくペンを塗り替えたりしたのだが、今は結局それも使われていない。市民に対して啓発するというのももちろんだが、分けた後にどうマネジメントしていくのかということが非常に大きな課題になっている。

啓発活動としては、ネパールのゴミの現状がどうなっているかというのを私のカウンターパートが色々な団体に行って研修を行っている。ゴミというのは習慣に関わる部分もあるので、今後10年20年と長い目で見たときに、子どもたちを育てることが非常に重要になってくる。私の他に、青年海外協力隊員が一人、環境教育という職種で1年前から入っているのだが、この男性が環境教育を小学校に対して進めていっている。

以上がカトマンズ市として私の所属先が行っている活動である。

## ■ JOCVdypika の活動① ～医療廃棄物について～

ここからは、私がプラスアルファで行っている活動についてお話しする。

医療廃棄物については、元々の要請内容には入っていなかった。しかし、カウンターパートと話したときに、私が看護師をやっていたということもあって、医療廃棄物についてもなんとかしてほしいという話があり、私が入ってから新しくこの活動を始めた。医療廃棄物に関しても、分別がきちんとされていないというのが大きな課題となっている。

病院の中にある処理施設では、ゴミは全部燃やそうということで、針や感染性のもの等を全ていっしょくたにして燃やしている。しかし、病院のフェンスの外に、血の付いたガーゼ等が沢山捨てられていたので、医療スタッフにどうしたのか尋ねたことがある。すると、医療スタッフは分別をしているしきちんと捨てているのだが、ゴミの回収をするスタッフがそこに廃棄したのだということだった。医療スタッフにとっては、分別した後、焼却されるまでは自分たちの知るところではないということだった。

このような路上での無断の廃棄等があるので、何が問題で分別がきちんとされないのかというのをしっかり把握したいということで、今、市役所のオフィスの人間と共に、カトマンズ市内の病院全てを回ろうと計画している。病院の看護師等の教育がだめなのか、それとも、そもそも分別するためのゴミ箱が無くてできなかったのか、それとも、回収するスタッフが問題だったのか、そういったところをしっかりと知ろうということだ。今、カトマンズ市内には170の病院があるのだが、それらを全て回るために、調査のためのサーベイシートを作ったり、回り方を話し合ったりして、それが今の私の一つの活動の柱になっている。

## ■ JOCVdypika の活動② ～下水処理について調査～

Septic tank（浄化槽）が、私の活動のもう一つの柱になっている。JICA というのは、青年海外協力隊の他に、シニアボランティアといって 40 歳以上の経験を積んだ方が行かれるボランティアと、もう一つ、専門家というのもある。下水処理の専門家の方がいて、その方と一緒に今、バグマティ川をどうにかしようという話をしている。

色々調べたところ、下水処理場は 5 つあったそうだ。ただ、今機能しているのは 1 つだけで、その 1 つも電気がないときには稼動していないということで、結局、カトマンズ市内では約 10%しか処理がされていないというのが現状である。今、アジア開発銀行が 5 つの処理施設がきちんと機能するように改善させようという新しいプロジェクトを始めている。しかし、5 つ稼働させるとしても 30%しか下水が処理されないとされている。そこで、専門家の方と、あとの残りについては、浄化槽を各家庭に置いたらどうなるのかということの研究として始めてみようとしている。

MDGs のゴール 7 として、環境の持続可能性を確保するということがあるが、ネパールはこの部分の発展が遅れているので、これも非常に重要な活動の一つになっているのではないかと思っている。

飲料水に関しては、ネパールでは、家の上に大きいタンクを載せていて、そこに飲める水を汲んで入れている。無くなったらまた水を買って入れるというのが、ネパールの今の上水の仕組みになっている。従って、3 日間水がないということもけっこうあって、私もネパールに来てからお腹を何回もやられてしまっている。安全な水があまり確保されていないというのも現状である。

## 4. 3 か月過ぎて考えること

3 か月過ぎて、やはり、発展に伴って発生した問題解決の難しさというのを非常に実感している。カトマンズというのは、村と比べると、違う国なのではないかという風にネパール人も言っているほどである。農村では、皆が自給自足のような生活をしていて、必要最低限の安全保障が確保されている中で、発展をしていくことが果たしてどうなのだろうと感ずることがある。しかし、カトマンズに住んでいると、インドと中国という大国に挟まれて、そこから、新しいプラスチックという概念だったり、コンピュータだったり、そういう色々なものがどんどん入ってきて、その中で、新しいゴミという課題が生まれてしまっている。こうした問題を解決するほどの金銭面や政治力、インフラが整っていない中で、人々の生活に影響するレベルにまでゴミが溢れかえってしまっているということについて、ネパール人がどのように解決していくのかというのは非常に難しい問題だと感じている。

JICA やアジア開発銀行、インドや中国等の色々なところから支援は沢山入ってきている。それでも、物が入ってきて結局それを使うのはネパール人である。よく、ハコモノ支援という言い方をしますが、ネパール人が使えるような設備でなかったり、ネパール人がどう使うかという指導やフォローアップもなく、結局壊れて使えなくなっていたりするのを目の当たりにして、使う人たちをし

# Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

っかり見なければいけないという風に非常に実感した。

ゴミの問題に関しても、カトマンズ市役所で色々な良い取り組みがあると私は感じた。コンポストを作るとか、カウンターパートが行う研修というのも非常に面白くて、色々な良いものがある。しかし、それを運営していくための人が少なく回らないという現状があるので、そうした良いものや良い考えをバックアップできたらよいと感じている。

## 5. 今後 ~キャリアプラン~

元々私は、バックグラウンドとして看護師というのがあって、今回、新しく環境というところに配属になったので、今後、そういったものを上手くコラボレーションしていきたいという思いがある。

また、震災後の避難所の公衆衛生だったり、元々は難民キャンプだったり、そういうところの公衆衛生をやっていきたくて思っていたので、避難所だったり、難民キャンプだったり、そういった一つのコミュニティに対して、衛生面をどう改善していくかというのを今後やっていきたい。今後、青年海外協力隊のコミュニティ開発という職種でも、上手くそのコミュニティを機能させて、課題を解決していくという手法も、経験としてやっていきたいと思っている。

最後に、カトマンズ市の様子や活動についてブログをやっているのでも、よろしければご覧になっていただければと思う。

## 6. 質疑応答

**鈴木理事長**：ミレニアム・プロミス・ジャパンは 2008 年にできたのだが、アフリカに行く学生を募集したところ、20 名以上が集まり、原稿用紙約 20 枚の論文を書いていただいて、面接を行った。松田氏はそうして選ばれた 3 人のうちの 1 人だった。その後の成長を見せていただいて、大変嬉しく思っている。

私は東北の大震災の 1 か月前に、遠野の酪農家の方と一緒に、クーデターが起きたマリに行っていて、酪農を見て帰ってきた。彼は、電気も水もないところで酪農をするのがどういうものかというレポートを書いてくださったので、遠野で電気が 1 週間切れたときに僕は 1 つも驚かなかったと言ってくれた。その後すぐ私も見に来るように言われて、東北の瓦礫の山を見たときに、どこかで見たような風景だと感じ、どこだろうと思ったらアフリカだった。セネガルなどはゴミがものすごい山になっており、これをどうするのかと私も思っていたのだが、今日話を聞いて、発展途上国はアフリカに限らず、同じような問題があるのだと思った。

ルワンダにも行ったのだが、その時は、空港でビニール袋を全部取られてしまった。ビニールが、アフリカで大きなゴミの問題になっていて、開発を妨げるため、持ち込んではいけないということ



# Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

だった。今のゴミの話聞いて、そういうことも共通していると思った。

ミレニアム・プロミス・ジャパンのスタッフの伊藤氏が、青年海外協力隊でマラウイに2年いて、病院の管理部門で働いていた。彼の方からも、ゴミの話について意見をいただきたい。

**伊藤氏**：お話を聞いて、マラウイと共通するものがあると思った。私がマラウイの病院で仕事をしていた時に、感染源になるような廃棄物の処理については、やはり同じような悩みを抱えていた。血の付いたガーゼや注射針等が無造作に捨てられているということがあった。松田氏は、日本で看護師というお仕事を経験されているが、日本とネパールの管理の仕方について、どこがどう違うのかをうかがいたい。日本も知っているし、ネパールも知っているという中で、何が違いで、どのギャップを埋めてあげるとよいのだろうか。

**松田氏**：ネパールには、たとえば針をその場で燃やせる機械が入っている病院もある。そのように病院の中の設備が整っていれば、スタッフにも危険という認識はあるので、針をちゃんと処理したり、ゴミを分別したりしている。しかし、それがたとえば病院の外に行った後どうなるかという、我関せずといった傾向が大きい。たとえばゴミを回収する人間というのが、知識がないために、どれだけ危険かということをつかずに、そのまま回収して、結局行き場がなかったら道路に捨ててしまうということもある。従って、ゴミを取り扱うスタッフに対して、医療のゴミがどれだけ危険なのかということと、実際にそれによって人に対してどのような被害が起きているのかということ、しっかりと伝えることが重要である。私が日本で働いていたときは、それがいかに危険かということをつよく把握していたし、回収する人間というのも、服装からしてやはり危険なものだという認識があった。従って、ネパールでも、医療スタッフはもちろん、その他のスタッフに対しても、しっかりと教育をしたり、自分が決まったことと違う行動をしたときに社会にどう影響を与えてしまうのかということについて、社会的責任を認識させたりすると違ってくるのではないだろうか。これは、医療ゴミ以外でも言えることだが、ゴミに対する責任というのをしっかりと教育していくことが重要になるのではないと思う。

しかし、ゴミを集める人たちの教育の機会というのは、低カーストというのがあるので、それほど多くない。そこが問題としてあると感じている。ネパールの人と話していると、ゴミを集める人たちを集めて、その人たちをターゲットにした教育をしないとだめだという風に言っている。現地の方々は色々アイデアがあって、何が問題かということ把握されているのだが、それを行動に移せないということがある。具体的にどうすればよいのかが分からないのだと思うのだが、今はそのように感じている。

**Q1**：多民族のため意見がまとまりにくいと思うが、そういったところの調整等はしているのか。

**松田氏**：市役所は、カーストが1番上の人と2番目の人がほとんどだ。民族も、バフンだったりネワールだったりするが、ネワールはカトマンズ市内にかなり多いので、私がまだ3か月というものもあるが、今のところ民族同士で意見が違ってしまいう現場には立ち会っていない。しかし、民族間の意見の調整というのも非常に大事だと思っている。

# Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

**Q2**: 今年の4月から分別回収を始めたということだが、現地の方には、燃えるゴミと燃えないゴミという概念がそもそもあるのか。たとえばプラスチックと紙を見て、こちらは燃える、こちらは燃えないというのは分かるのか。

**松田氏**: それは分かる。一度、分別をしようという啓発活動をするために大きなイベントを行った。そのときにゴミを集めて、これは燃えるか燃えないかということをやったのだが、そのときにも、しっかり把握はしていて、プラスチックは燃えないということは分かっているようだった。

**Q3**: 分別した後、燃えないゴミはどのように処分される計画なのか。

**松田氏**: 今は、プラスチック回収を行っているのが、プライベートの会社だけである。そして、マフィアの方も集めているということで、そこが非常に問題になっている。市役所が集め出すと、そういうプラスチックでお金を稼いでいた人たちの仕事がなくなってしまう。従って、プラスチック回収を始めたのはよいけれども、色々な絡みが非常に難しく、具体的にそれをどこに持っていくのかとか、プライベートの会社に受け渡すのかとか、そういうところまで実は至っていないというのが現状である。JICAもずっとこれを大きな課題と言っていて、何度も焼却施設を作ろうとしたり、プラスチック工場をどうにかしようとしていたが、結局、上手くまとめることができない。それでも何とかしないとイケないということで、ボランティアレベルからの種まきということで今回私が派遣されている。本来であれば、市が、たとえば回収業者を整備したりしてきちんとやれば、もっと上手く回るのだろうが、それができずにいる。教育というレベルで、少しずつ種まきをして、その子たちが大人になったときに、ネパール人が変えられるようにというのが JICA の支援としてできることといえる。

**Q4**: カトマンズは発展している都市で、村とは別の国のようにになっているというお話だったが、農村だと今の生活で満足しているのだろうか。

**松田氏**: アフリカ等では水が無かったり、飢餓や貧困があったりする。しかし、ネパールは、農業が一番の産業ということもあって、食べ物があって、農村の方だと川に行けば水もあるため、必要最低限の生活レベルは保たれている。これは、特にアジアの特徴でもあると思う。農村に住んでいる人に実際に聞いていないので分からないのだが、それ以上を求めているという印象はあまりない。それでももちろん、子どもを学校に行かせたいというのはあると思う。例えばカトマンズに行って、タクシーの運転手をやるのだとか、そういうのはあると思う。

**鈴木理事**: ゴミの回収とマフィアの関係については、発展途上国だけではなくて、ニューヨークでもそうだという話を聞いた。私はニューヨークに2年位住んでいたことがあって、時々今でも行くのだが、ニューヨークで飲食店を始めようとする、マフィアとの関係がとても大切で、上手くいかないとゴミの回収をしてもらえないという話を聞いた。それから、ニューヨークの会議に行く時はなるべくホテル代を節約して友達の家泊めてもらうのだが、とても高級なマンションでは、

# Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

エレベータ係やゴミ回収係等が何人も働いている。住人は、ゴミを分別せずに、とても大きなダストビンに全て一緒にして捨てている。それはプラスチックを分別しなくても場所があるから捨てるもよいということなのだろうか。

**参加者**：おそらく働く人たちの雇用のために、まずとにかく投げてもらって、それを分別する人の仕事を増やすためではないだろうか。私たちが分別してあげてしまうと彼らの仕事を奪うことになってしまう。従って、お金を出せる人たちはわざとそのまま捨てるということなのだと思う。

**鈴木理事長**：カーストについては、アフリカでも身分制度のようなものがある。庭師の人は庭師、掃除婦は掃除婦と決まっていて、裕福な家に生まれるとそういうことをしてはいけないと言われて育ってきたらしい。ゴミを捨てたり掃除をしたりするのは、自分の仕事ではないのでやらないという裕福な人が多いので、そういう問題があると思う。

**松田氏**：私も一度非常に驚いたことがあるのだが、カトマンズのすぐ隣のラリトプル市というところに、もう一人の JOCV の協力隊員が行っている。彼がゴミの現状を知りたいということで、ゴミ収集車に乗せてくれるように頼んで、毎日収集車に乗って手伝いのようなことをしていた。すると、同僚から、お前のカーストは何だという風に言われて、それは低カーストのやる仕事だからお前はやる必要がないと言われてしまったということだった。そもそも、子どもが掃除やゴミ捨てをすると、なんてはしたくない子だと言われてしまうくらいだ。従って、ゴミ拾い活動なんて我々のやる仕事ではないという思いがそもそもあるようだ。もちろん、そういった文化や習慣というのは、意味があって作られたものなので非常に重要だと思うが、ゴミの問題解決に関しては、色々な所で歪みが出てきてしまい、やはりカーストという問題が大きいということを非常に感じている。

**鈴木理事長**：ルワンダでは、大統領が月に1回第3土曜日をお掃除の日と決めて、大統領自らゴミ拾いをしていたらしい。もう拾うゴミはなくなってしまったので、今は別の運動をしているらしいが、本当にルワンダはゴミもなくてきれいなところで、あの国はカーストがないのだろうか。その反面、最近のニュースで、日本のある市ではゴミの袋が決まっていて、その袋を使っていない場合は担当者がゴミ袋を開けて中を見て、名前があったりして住所が分かったら、決められたゴミ袋を使ってくださいという通知まで始めるらしい。たとえば名前だけ分かって住所が分からない場合はどうするのかとレポーターが聞いたところ、警察ではないのでそこまではしないということだったが、干切られたゴミを寄せ集めて、住所が分かると注意をするというところまで行っているらしい。プライバシーが日本ではなくなってきている。日本で黒いゴミ袋から透明のゴミ袋に変えたときにも、既に欧米からは、プライバシーがなくなるのではないかという反対もあったらしいのだが、なかなか難しいと思う。

**松田氏**：今、市役所でも医療廃棄物について、パニッシュメントがあるという風に言っているのだが結局うまくいっていないので、その辺をしっかりと取り締まれるように市がやっていったらよいのではないかとも思う。

**参加者**：松田氏がわずか3か月でこれだけのことを皆さんに伝えられるということは素晴らしいと

# Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

思う。私はネパールで教育支援をやっており、2年前に現地の学校に行ったときに、子どもたちがそれぞれお弁当を食べた後、食べた紙屑を全部散らかしていくのを見て、カルチャーショックを受けた。日本の学校では、そんなことをやったら先生に叱られてしまう。その後どうするのかと思ったら、子どもたちが教室に戻ってから、売店の方がそれを拾っていて、それが当たり前ようだった。逆に今度は、その学校の先生が日本の学校を訪問したことがあった。掃除の時間を見て、日本では生徒がこういうことをするのかということで、今度は逆にカルチャーショックを受けたようだった。自分が向こうへ戻ったら、少しでも学校をきれいにすることをやっていきたいということと話していた。ただ、どうしても障害になるのが、先ほどから話題になっているように、やはり生活習慣、文化、カーストだ。ネパールだけではなく、バングラデシュでも、朝薄暗い中からプラスチックを集めてそれを売って生活している人たちの集団がいた。その辺が日本と違うと思う。松田氏には、全部自分が思っていることはできなくても、やはり種をまいて、2年間の仕事を是非やっていただきたいと思う。

**Q5:** そもそも燃えないゴミはどんなゴミがあるのか。日本と同じように、プラスチックや家電等か。

**松田氏:** その他にボトル瓶等もある。ネパールでは、たとえばファンタやコークの瓶というのは、基本的にリサイクルになっておりそのシステムはできているので、基本的にそういったゴミはない。しかし、お酒の瓶等はゴミとして出る。また、大きい家電や看板などもある。大きい看板は今、私のオフィスの隣に集めてあるのだが、それもいつか増えて行き場所がなくなるのではないかと思う。

**Q6:** そもそもゴミを減らすことはできないのだろうか。昔は日本でも牛乳を瓶で飲んでそれをリサイクルしていた。今はペットボトル等になって楽になる分、ゴミは増えてしまうが、ネパールでは使い捨てが多いのか。

**松田氏:** 基本的には使い回しが多いと思う。たとえば電化製品も、基本的に修理をするという考え方だし、壊れて本当にどうしようもなくなってしまったものしかゴミとして出していない。寄付で貰った回収車も、もう何台か壊れてそのままになってしまっている。

**鈴木理事長:** アフリカでは、JICAの人たちが指導して、プラスチックをハンドバッグにしたりしている。中側がプラスチックの元ゴミだったもので、表側は布地だったりして、そういうものはJICAのアフリカの事務所によくお土産で売っている。そういうことはしているのか。

**松田氏:** ネパールの牛乳は1リットル位のビニールパックに入れてあるのだが、それを回収して紐にして籠を編んだり、新聞紙を集めてそれでバッグを作ったりしているが、販売するというレベルには全く至っていない。これも今、私がやっている活動の一つなのだが、ゴミは資源になるのだというメッセージとしてそういうものを作っている。

**鈴木理事長:** 今ここにあるのは、ウガンダのミレニアム・ビレッジのHIVポジティブの女性たちが作ったアクセサリーである。5年前に私が行った時は、カレンダーの残りの紙を巻いてネックレスにしていた、まだあまり魅力的なものではなかったが、今はJICAのボランティアの人も2人位入

# Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

ってくれて、色々な人の指導によって色々なデザインのものを作っており、けっこう人気があって、原宿のイッセイミヤケでも売られるようなものができてきた。しかし、そういうことで幾らゴミを、再生していくとしても、限界があるのだろうと思う。

**Q7**：そもそもプラスチックは燃えないのか。今、中央区では大体のものは燃えるゴミで受けてくれる。

**松田氏**：プラスチックは燃やせるが、そのためには焼却施設を作る必要がある。そういったプロジェクトもあったのだが、結局お金がないということで、その施設を作れないということだ。また、焼却施設を作ったら作ったで、今度はプラスチック業者との関係に問題が出てくるのではないかと思う。

**参加者**：プラスチックによってはかなり有害なものがある。たとえば杉並区も、リサイクル用のプラスチックでなければ燃やしてよいということになっているが、それはかなりの高熱で燃やせるので、ダイオキシン等の有害な物質が出てきても分解ができるからである。そういう技術を発展途上国で運営するにはかなり電力を消費するので難しいのではないかと思う。それよりも、なぜリサイクルをする必要があるのかとか、なぜゴミを減らす必要があるのかとか、プラスチックを環境中に排出してしまうと最終的にどういう問題に行きついてしまうのかということなどを皆が理解しない限り、ゴミを減らそうという意識に向かないと思う。

**松田氏**：その通りで、具体的にどれくらい自分の生活に影響が出てくるのかということをしっかり訴えていかないといけない。私も他の先輩の隊員にすごく言われるのだが、やはり頭では分かっているが自分の問題とは関係ないことだという風に皆思ってしまうようだ。そこをどれだけ上手く言えるかというのが、たぶん今後大きいと思う。たとえば、医療廃棄物も、血や毒を持ったものが土に返って、その土で作られた野菜を食べることになるがそれでもよいのかとか、それぐらいまで言わないと、自分の問題として捉えられないのではないか。だから、一般論を並べるだけではなく、具体的に示すなど、発信するやり方を考えないといけないとよく言われている。

**鈴木理事長**：アフリカに行くと日本の中古車がいっぱい走っていて、排気ガスを沢山出しているが、ネパールではいかがか。

**松田氏**：それについては、活動とは関係ないが、私の非常に興味関心のある分野の1つである。ネパールの大気汚染というのは、車の排気ガスが黒い。ほとんどインドと中国の中古車が入ってきているのが現状だ。というのも、新車を買うためには300%の関税がかかるそうだから皆が中古車を買う。バングラデシュ等だと、日本車の中古車なのでそこまで排煙がひどくないのだが、ネパールはインドや中国の古い車なので、やはりかなり排煙がひどい。今、特にカトマンズは盆地内ということもあって空気がこもってしまうので、呼吸器系の疾患も非常に増えているようで、ネパール人もマスクをしないと歩けないくらいだ。

**Q8**：排気ガスの規制等はないのか。

# Millennium Promise Japan

ミレニアム・プロミス・ジャパン

**松田氏**：今はおそらくそういう法律はないと思う。私も着いて1か月間は咳が止まらなくなってしまって、色々調べてみたところ、PM10 や 2.5 を調べるための機械を一度スウェーデンかどこかが入られて随時見ていこうとしたようだが、それも2年位で壊れてしまったようだ。しかし、ネパールは排煙や砂埃がひどくて空気は汚いものの、工場はレンガ工場以外にあまり無いので、中国のように排気ガスと色々なものが組み合わさってPM2.5になるのに比べると、そこまでは至ってはいないようだ。しかし、カトマンズ盆地内を少し離れた山の上から見ると、空気が茶色い。

**鈴木理事長**：5年前に松田氏と一緒にモザンビークに行ったときは、私たちは電気も水もないところで5泊して、彼女はテニス部だったから男性よりずっと元気で、子どもたちと飛び回って遊んでいた。その彼女がおなかを壊したり咳が止まらなかつたりした話を聞くと、環境がかなり厳しそうだと感じる。

**松田氏**：最近是中国が出てきたが、昔は、カトマンズは世界で一番空気が汚いと言われていたらしい。今はリオデジャネイロだったり中国だったりするが、伸びてきている国が、次に抱えるのが大気汚染の問題のようだ。

**Q9**：下からの環境教育の他に、上からのモデル事業も必要なのではないかと思う。日本の国からの支援もよいが、もっと民間企業とのコラボでゴミ処理に関するプロジェクトを行って、一つのモデルを作っていくことも必要ではないか。たとえば埼玉県では、消防自動車や救急車等の各市町村でいらなくなった車を、外務省の支援をいただいて、ネパールやミャンマー、トンガ等に送っている。

**松田氏**：外務省の草の根支援で、ゴミエネルギーをやろうという企業さんが一つ手を挙げてくださっているのだが、水と電気がないという理由で結局流れそう。従って、やはりまずは水と電気だろうということで、今 JICA は新しくダムを作る事業を始めている。水力発電で電気を作って、それをカトマンズに送るといふものだ。それによりおそらく3割位は回復するのではないかとされている。ネパール人もそういうのを知っていて、JICA が今作ってくれているから、2年後にはもう少し計画停電がよくなるのではないかという話をしている。

**鈴木理事長**：帰っていらしたら将来何をしたいか。

**松田氏**：まずは、公衆衛生の分野で、今までの経験を学問という形にしたい。今後は国際的な場面で仕事ができたらよいと考えている。

以上